

初夏の朝、明け方羽化したばかりの赤トンボが、イネの葉っぱの上で羽が乾くの待ち、夜になればヘイケボタルが乱舞する。
生きものがいっぱい田んぼには、農家もむらも元気になる力がある。

5kg 4500円の蛍米が大人気

金沢市から車で約1時間、白山市(旧鳥越村)・渡津町は12戸の小さい集落だ。標高220m、コンビニも信号もない静かなところだが、車を降りると一変。田んぼからカエルの大合唱が聞こえてくる。「人は少ないけど、虫や小動物はたくさんおるぞ。アマガエルにカジカガエル、イトミミズ、タニシ、ヒメモノアラガイ、最近赤トンボも増えた。これが人間と生きものとの共存・共生、『生物多様性』ってやつよ」

そうやって案内してくれたのは、水田21haの米専業農家・大田豊さん(68歳)。動物写真家の小原玲さんが「日本で一番ヘイケボタルが飛ぶ田んぼ」という3haで、無農薬・無化学肥料栽培の「渡津蛍米」をつくって7年目になる。

谷筋に連なる小さい田んぼは、東西を山にはさまれているため日照時間が短く、

田んぼの話

白山市は、2005年に1市2町5村の合併で誕生。旧鳥越村は、手取川の支流・大日川に沿った河岸段丘に29の集落がある



2011年に商標登録した「渡津蛍米」(品種:コシヒカリ)は、「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」で金賞を2回受賞している



おおた農場代表の大田豊さん。3年前に息子がUターン就農し、現在は妻と3人の家族経営。経営面積は水稲21haで、うち無農薬・無化学肥料の「渡津蛍米」3ha、農薬7割減の「渡津米」5ha、農薬3割減のエコ栽培米13ha

反収は平場の半分（4〜5俵）しかない。それでも寒暖の差があり、水や土もいので食味には自信がある。白米5kg4500円の「渡津蛍米」は全量直販。金沢市内のホテルや都内の料理店をはじめ、宅配やネット販売で売り切れてしまう。

ホタルは豊かな田んぼのパロメーター

「生きものの数と多様性は、田んぼの豊かさを示すパロメーター」というのが、大田さんの持論だ。

とくに「田んぼの申し子」と呼ばれるヘイケボタルは、田んぼの環境や米づくりの影響をモロに受ける。圃場整備や水利システムの変化、農薬の使用などにより全国的に激減しており、地域によっては準絶滅危惧種に指定されるほどだ。

だからこそ、ヘイケボタルがもたらす安全・安心の効果は絶大だと大田さんは考える。「無農薬」や「エコ認証」を謳うより、そこに生きものがいることが安全の何よりの証明になるからだ。

それに、大田さんが里に暮らす生きものの中でもホタルにことさら深い愛情を注ぐのは、子供の頃の懐かしい体験が大きかったこともある。

日本一ヘイケボタルが舞う

石川県白山市渡津町・おおた農場

文=編集部

イネの葉っぱに止まって発光点滅を繰り返すヘイケボタル 写真=小原玲

